

3月11日は岩手にいた。県と大槌町合同の追悼式に出席した。その後、海を見た。

「林檎の木を植える」―。それが「うず潮」に書いた最初のエッセーだった。2008年11月11日のことだった。当時、私の研究室では、所属していた学生がアフリカで誘拐・拉致されるといふ事件に巻き込まれ苦勞を重ねていた。メディアに名前が出、その所属が取りざたされ、それでも、人質安全の確保のために、その事実を認めないでほしいとの要請があった時期だった。

一人の人間の苦しみを思いながら、何もできない状況に立ち尽くしていた。それは私自身がハイチで



やまもと たろう  
山本 太郎

最後に「ありがとう」

一部の人々は事件を「自己責任だ」と非難した。そうした人々へ向けて書いたのが、「明日、世界が滅びるとしても、今日、あなたはリンゴの木を植える」からとつた「林檎の木を植える」だった。その中で書いた。「国際協力という行為が時に悪意で報いられることがあったとしても、私は、リンゴの木を植えようとする人に共感を覚える人間でありたい」と。届

内戦に巻き込まれ、退避も避難もできない状況にあった時より精神的にはつらいものだった。ただ、心配する、それしかなかったからだ。

と津波が発生した。2人のかげがえのない友を失い、104歳の祖母が逝った。ハイチでは地震の後のバラックに多くの人が白い旗を立てた。生き残った者がいることの証しだった。

「ひこばえ」の話を思い出した。「ひこばえ」とは、樹木の切り株から生えてくる若芽のことだ。東日本では、寒さに震えながらも、人々は、その夜見た星の美しさを口々に語ってくれた。その都度、その時の「小さな思い」をつづってきた。言葉は、無力だが、それでも言葉を紡いでいくことで救われた。救われたのは、私自身だった。最後に、一言。ありがとう―。(長崎大学熱帯医学研究所教授)